

テーマ 息切れと咳 平成28年度漢方医学講座・臨床講座

息切れと咳を考える

明治薬科大学臨床漢方研究室

矢久保 修嗣

(平成28年11月13日収録)

今日は息切れと咳を漢方から考えてみた話をさせていただきます。

呼吸器症状と処方・生薬の作用

気道にいろんなものが出てくると咳がでます。それを吸収すると咳が止まるだろう(鎮咳剤)。気道が乾燥しているのであれば、気道を潤せば良くなるだろう。生体を潤すことによってある意味では冷やしていくような働きもあるだろう。これは清熱作用あるいは抗炎症作用と言ってもいいだろう(滋潤剤・清熱剤)。化膿性の炎症が起こっているということであれば、膿を出してしまえばいいだろう(排膿剤)。咳を一つの気の流れ、空気の塊が逆流してくるというように見れば、逆流を抑えると咳を抑えることにつながり、同時に吐き気が抑えられることもあるだろう(制吐剤)。あるいは、エネルギーの塊である気の逆流が咳となっていると見て、気の巡りの正常化をはかればいいだろう(順気剤)。咳の原因となっている炎症を止める。そのためには熱をさまし、炎症を抑える(清熱作用)。いろんな病気にかかって最終的に体力が落ちてくるとエネルギーとしての気が減ってしまう。この気を増し体力を回復させることで咳を止める(補気剤)。咳に伴う痰は、気血水の水だと考えれば、水を調節する(利水剤)ことで治まるだろう。

漢方では、このような処方で呼吸器系の症状を治していると考えられま

■神秘湯(麻黄・甘草・杏仁・柴胡・厚朴・蘇葉・陳皮)

この柴朴湯に近い処方に、神秘湯というのがあります。柴胡に厚朴、蘇葉という気の流れをよくする生薬を加え、それに麻杏甘石湯から石膏を抜いたものが加わっています。おそらく精神的なストレスがあり、抑うつ傾向のあるようなもので喘息を伴った人に使うのだと思います。

この二つ(柴朴湯と神秘湯)を比べてみます。

両方とも抑うつ傾向がある。だから気の巡りを改善するような、柴胡、厚朴、蘇葉などを使う。柴胡剤なので胸膈苦満がある。中間証で、抑うつ傾向が強い。虚実は中間証、あるいは中間証以上。そして喘鳴、呼吸困難が強い場合には神秘湯を使う。こんな風に使い分けを考えていただければと思います。

■乾燥症状を伴う乾咳

■麦門冬湯(麦門冬・半夏・人參・粳米・甘草・大棗)

出典は「金匱要略」です。大まかに現代語訳をすると「激しい気逆のため、気がのぼり、呼吸が苦しくて喉がつまったように咳嗽する人の、気逆を押さえて気を下げるには、麦門冬湯が有効である」と書いてあります。

麦門冬湯を構成するのは五つの生薬です。麦門冬は気道を潤す、滋潤する。そして乾燥性の咳嗽を抑える。半夏は吐き気・気逆を抑える。そこに人參、甘草、粳米、大棗という消化器系の機能を高めて元気にするような生薬が使われています。

麦門冬湯を使用する場合に大事なのは自覚症状としての咳こみです。咳がしつこく続き、始まると長く持続し、顔が真っ赤になるほど激しく咳き込む。そして少量の粘っこい痰を出す。これが麦門冬湯の適応です。

痰が多い場合に使用すると、気道の分泌を高めて喀痰の量が増え、かえって症状が悪くなることがあります。痰の少ないときに使うといわれてい

ます。また喉が乾燥しているときに使われます。他覚的には咳がひどくて、顔が真っ赤になる。舌は乾燥していることがある。腹力はあまり強くなくても良い。心下痞硬がある。体力中等度以下でも使用できます。やや虚証で強く咳き込んで喉が乾燥している。そういった気管支炎や咳喘息などに使われます。

浅田宗伯は、『勿誤藥室方函口訣』の麦門冬湯の項に「『肘後』にある通り“まず咽燥して渴するもの”に用いるのが的治である。『金匱』には、“大逆上気”というばかりで、漫然としているが、この方は、頓嗽、勞嗽(慢性の呼吸器感染症、呼吸器疾患のこと)でも、妊娠の咳逆でも“大逆上気”に大いに効がある。この四字は簡古であるが深い意味がある」と記載しています。

尾台榕堂は、『井観医言』に治験を書いています。

ある男が、傷寒(風邪、感染症)にかかって発汗の期を失し、脈が浮いて大きくて、胸中満して煩し、顔面が熱し、目は赤く酔状を呈し、耳聾、口燥、咽乾、渴して飲の度を失い、黄黒の舌苔を生じ、心下堅、身体強重して転側不能となり。下利7~8回、気力は衰えて、7~8日経過した。小柴胡加石膏湯を用い、調胃承気湯を兼服させた。服すること数日、下利その他は良くなった。食欲も出た。全身に赤斑を発し、これは痒み痛みなく、咳して短気、呼吸促迫、小便不利となった。寝汗をかき、耳が鳴るので、小柴胡湯合茯苓杏仁甘草湯。これで赤斑、寝汗など諸症は去った。しかし咳嗽があつて涎沫を吐き、咽が乾いて渴するので麦門冬湯を与えた。

こんな風に傷寒、風邪のような感染症にかかったあとに、最終的に喉が乾いて渴するという状況に麦門冬湯が使われていたわけです。

次は私の経験です。

42歳の男性。咳嗽。3日前に熱が出た。喉が痛くて、軽い咳もあった。葛根湯と桔梗湯をお湯に溶かして内服した。それぞれを当日には3時間おきに1包ずつ服用した。その日は合計4包、まあ、風邪を治すときに1日3回漫然と飲むのではなくて、2時間おきに良い汗が出るまで攻めるというやり方をします。そうしたら、その夜に多量に発汗した。翌日には解熱したが、それから痰のからまない激しい乾性咳嗽が出現した。風邪を治すときには、「微似汗」といわれる心地の良い汗をうつつらとかくと風邪が治ると「傷寒論」には書いてあります。この例の場合は、汗を出しすぎたようで、脱水気味となり乾燥状態になってしまった。気道が乾いて乾性咳嗽が出るということになったわけです。こういうときには麦門冬湯を使います。麦門冬湯をお湯に溶かして内服した。これはよく効きます。4時間で咳がなくなった。でも作用が少し短かった。また咳が出てくるので、その日は5回内服した。次の日は3包ですんだということでした。麦門冬湯は良い薬ですが作用が短いという印象を私は持っています。患者さんから、1日いくつまで良いかという話が出たときに、6包ぐらいならしょうがないかという話をします。これは、えらい先生に質問したときに、原方から言えば8包くらい大丈夫だろうけどまあ6包にしといたら、といわれたことがあるからです。

気管支喘息に伴う乾性咳嗽50例。喘鳴を伴わない乾性咳嗽37人に麦門冬湯を4週間投与して鎮咳効果を判定したという報告があります(新妻知行: ASTHMA, 14(3): 81-84, 2001)。

4週後の効果判定では、喘息に伴う乾性咳嗽では有効が68%、喘鳴を伴わない乾性咳嗽54%という結果になっています。喘鳴の有無で有効率に大きな隔たりはなく、だいたい4週間飲めば治るということです。

慢性呼吸器疾患を有する高齢者の喀痰喀出困難に対する効果を、麦門冬